

## 第18回日本語聴覚学会開催に込めた思い

竹内 茂伸

第18回日本語聴覚学会 学会長／一般社団法人山陰言語聴覚士協会 会長／鳥取県言語聴覚士会 会長  
社会福祉法人こうほうえん錦海リハビリテーション病院 副院長

平成29年6月23日（金）、24日（土）の2日間にわたり、第18回日本語聴覚学会（以下、本学会）を鳥根県松江市のくにびきメッセで開催し、無事成功裡に終えることができました。日本語聴覚学会では初めての地方都市開催でしたが、多方面の皆様からご協力、ご支援などをいただき、一般演題数は過去最多の421演題、総参加人数は2,210名（学会参加者1,775名、市民公開講座参加者250名、ランチョンセミナー・展示・協賛企業参加者185名）と、ST以外にも、地域の多くの方々にお越しいただいた学会となりました。

本学会は「地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される言語聴覚士になる—地域包括ケアに求められる言語聴覚士の役割」をテーマとしました。われわれSTがかかわる患者さんの多くは、言語機能、構音、嚥下障害などを呈しています。そのため病院を退院した後に具体的な問題が頭在化することがあり、本来これらの患者さんやご家族には、長期にわたったりハビリテーションやフォローが必要です。ただ現在、STの70%が医療保険分野で働いており、介護保険分野で働く者は8.8%と、地域に出ているSTはわずかです。入院期間が短縮している急性期、回復期に偏在している状態では、継続的な支援が困難なため、患者さんやご家族のニーズに応えることが難しく、かつ、STの活路を狭めることにもつながります。このような現状をまず多くのSTに認識してもらい、「入院中から退院後の生活を見据えた本物のリハビリテーションをするSTを育てたい」。そして「地域に出るSTを増やし、何より、地域に出て働く楽しさを伝えたい」という思いが高まり、学会



学会スタッフとの記念の一枚

開催を決意いたしました。

STが国家資格になったのが18年前で、現在、全国に約3万人のSTがいます。その中の7割が20～30代の若者です。他のリハビリテーション職と比べ、まだまだ規模が小さく若い職能団体のため、STが地域包括ケアの中で存在意義を示すためには、個々のSTはもちろんですが、団体としてSTの役割や必要性を発信し続ける必要があります。そのため、本学会では一般演題の座長を都道府県士会の会長に依頼し、47すべての都道府県から会員が集まる学会にしました。さらに今回、日本語聴覚学会では初めて、蒲原基道厚生労働省老健局長（現 厚生労働省事務次官）を特別講演にお招きし、「介護保険をめぐる最近の動き—地域包括ケアに求められる言語聴覚士の役割」のテーマでご講演いただきました。本学会を機に、社会の動向に目を向けるSTが増えていくことを願っています。

最後になりますが、STが真に「地域に開かれた、地域に愛される、地域に信頼される」存在になれるよう、今後も一丸となり継続した活動を行っていきたいと思います。